

博士論文（要約）

論文題目 第一次世界大戦後における日本陸軍の自己改革に関する研究  
—国民・皇室・帝国の視点から—

氏 名 朴 完

## 目次

序章 .....	1 頁
第一章 陸軍の武官派遣と大戦情報収集活動の様相 .....	6 頁
第一節 大戦勃発直後における情報収集活動とその限界	
第二節 大戦中期における情報収集活動の本格化とその諸相	
(一) 従軍武官団の拡大とその活動の強化	
(二) その他の武官の派遣増加	
(三) 中立国における情報収集活動	
第三節 大戦後期以降の情勢変化と情報収集活動への影響	
(一) ロシアからの武官撤収とアメリカへの派遣増加	
(二) 大戦終了後における武官派遣の様相	
小括	
第二章 陸軍の勝敗分析と「大戦の教訓」の成立過程 .....	26 頁
第一節 大戦勃発直後における勝敗予測	
第二節 大戦中期における軍事力評価とその教訓	
(一) 両陣営の軍事的能力に対する評価	
(二) ドイツの善戦の原因分析とその教訓	
(三) ロシアの敗北・アメリカの参戦と教訓への影響	
第三節 大戦終結前後における勝敗分析とその教訓	
(一) 大戦末期の攻防と勝敗予測	
(二) 終戦後の勝敗分析と「大戦の教訓」の成立	
小括	
第三章 田中義一の軍民一致論と「大戦の衝撃」の意味 .....	50 頁
第一節 日露戦後における軍民一致論の始動	
(一) 田中の軍民一致論の特徴	
(二) 田中の皇室・帝国観	
第二節 大戦中における軍民一致論の展開	
(一) 「国民」の範囲の拡大 ―青年・未教育補充兵・女性へ	
(二) 陸軍と国民・皇室・帝国の一体化	
(三) 田中の大戦観と軍民一致論への影響	
第三節 「大戦の衝撃」と軍民一致論の危機	
小括	
第四章 大戦後の陸軍改革 (一) ― 軍人の生活安定と兵役負担軽減による軍民関係の修復 .....	75 頁
第一節 大戦終結直後における軍民関係の危機	

第二節 大戦後における軍民関係修復のための諸施策	
(一) 俸給・恩給の引上げと軍事援護団体の設立	
(二) 兵営内の待遇改善と在営期間の短縮	
小括	
第五章 大戦後の陸軍改革(二) — 「軍人の保護者」としての皇室像の創出……………	92 頁
第一節 「大元帥」としての天皇像の危機	
(一) 天皇の大元帥化の過程	
(二) 大戦の終結と大元帥像の動揺	
第二節 大戦後における「軍人の保護者」像の創出過程	
(一) 軍隊内における天皇・皇族の儉約の実践	
(二) 軍事援護事業への皇室の関与	
(三) 皇族男子の軍人化慣例の見直し	
小括	
第六章 大戦後の陸軍改革(三) — 「朝鮮人軍人」を媒介とした帝国内の「統合」強化の模索……………	111 頁
第一節 「朝鮮人軍人」の発生と問題点	
(一) 「朝鮮人軍人」の種類と発生経緯	
(二) 「朝鮮人軍人」の問題点	
(三) 「朝鮮人軍人」の待遇改善をめぐる議論	
第二節 三・一運動と「朝鮮人軍人」問題への注目	
(一) 陸軍の新首脳と朝鮮支配構想	
(二) 三・一運動後の支配政策の見直しと「朝鮮人軍人」問題	
第三節 三・一運動後の「朝鮮人軍人」問題への対応様相	
(一) 朝鮮軍人	
(二) 朝鮮人将校	
(三) 憲兵補助員	
小括	
終章……………	137 頁
注……………	142 頁
表一一一四……………	189 頁
附表 第一次世界大戦期における陸軍派遣武官リスト……………	205 頁
参考文献目録……………	225 頁

本文

本論文は出版社との出版契約が結ばれており、全文公表できません。

著 者 名 : 朴完

題 号 (仮) : 第一次世界大戦以降における日本陸軍の変貌

出 版 社 : 図書出版平思里

出 版 年 : 2028 年 (予定)

## 参考文献一覧

### 一、未刊行資料

#### ・国立国会図書館憲政資料室所蔵史料

「井上馨関係文書」、「今村均政治談話録音速記録」、「大隈重信関係文書」（原本は早稲田大学図書館所蔵）、「小畑敏四郎関係文書」、「斎藤実関係文書」、「田中義一関係文書」（原本は山口県文書館所蔵）、「立花小一郎関係文書」、「寺内正毅関係文書」、「福田彦助関係文書」

#### ・防衛省防衛研究所戦史研究センター資料室所蔵史料

「密大日記」、「欧受大日記」、「西受大日記」、「大日記甲輯」、「大日記乙輯」、「式大日記」、「大日記 付属書類」、「朝鮮騒擾事件関係書類」、「参謀本部歴史」、「講和会議に関する奈特報 第一一十一号報告」（中央一戦争指導外交文書一二四一）、本間雅晴歩兵大尉「英国陸軍隊附視察報告」（中央一軍事行政その他一一一八）、「陸軍教育史 明治別記 第九巻 陸軍砲工学校之部」（中央一軍隊教育教育史料一四七）、「陸軍砲工学校歴史 明治篇」（中央一軍隊教育諸学校一一〇）、

#### ・国立公文書館所蔵史料

「太政類典」、「公文類聚」、「公文雑纂」

#### ・外務省外交史料館所蔵史料

「帝国ニ於テ兵器、需品購入並依頼製造関係雑件」（5.1.5.0.15）、「帝国陸海軍将校海外派遣雑件 陸軍之部」（5.1.10.0.4-1）、「欧州戦争ニ関スル情報 陸軍之部」（5.2.2.0.48-4）、「帝国武官出張駐在及留学関係雑件 陸軍之部」（6.1.6.0.1-1）

#### ・宮内庁宮内公文書館所蔵史料

「各特別会計決算」（大正一一年度以降は「各会計決算」）、「行幸録」、「経済会議録」、「請願件銘簿」、「大正天皇実録」、「自大正三年度至同十四年度 御資会計財本部計算書・計算説明書・明細表」（識別番号六四一三七）、「自大正三年度至同十四年度 御資会計収支部歳入歳出決算」（六四一三八）、「自大正三年度至昭和四年度 通常会計歳入歳出予算決算額諸表」（六三八三九）

#### ・東京大学法学部付属近代日本法政史料センター原資料部所蔵

「岡本愛祐関係文書」

### 二、刊行資料（公文書、機関沿革史など）

・「第四一一四四回帝国議会衆議院議事速記録」（国立国会図書館帝国議会会議録検索システム）

- ・「第四一―四四回帝国議会衆議院委員会議録」（同右）
- ・「第四一―四四回帝国議会貴族院議事速記録」（同右）
- ・「第四一―四四回帝国議会貴族院委員会議事速記録」（同右）
- ・『帝国議会衆議院報告』（衆議院事務局）
- ・『帝国議会貴族院事務局報告』（貴族院事務局）
- ・『帝国在郷軍人会三十年史』（帝国在郷軍人会本部、一九四四年）
- ・外務省編『日本外交文書』大正三年第二・三冊、巴里講和会議経過概要（外務省、一九六五・一九六六・一九七一年）
- ・海軍大臣官房編『海軍制度沿革』巻一二（海軍大臣官房、一九四〇年）
- ・義済会編『財団法人義済会沿革史』（義済会、一九二九年）
- ・宮内省編『復刻版 宮内省省報』大正編一一八（ゆまに書房、一九九九年）
- ・総理府恩給局編『恩給百年』（大蔵省印刷局、一九七五年）
- ・帝国軍人後援会編『社団法人帝国軍人後援会史』（帝国軍人後援会、一九四〇年）
- ・飛鋪秀一編『愛国婦人会四十年史』（愛国婦人会、一九四一年）
- ・報効会編『財団法人報効会史』（報効会、一九三八年）
- ・陸軍省編『自明治三十七年至大正十五年 陸軍省沿革史』下巻・附録（巖南堂書店、一九六八年復刻、原本は一九二九年）

### 三、刊行資料（私文書、対象人物の姓名順による）

- ・小林龍夫編『翠雨荘日記―臨時外交調査委員会会議筆記等一』（原書房、一九六六年）
- ・上原勇作関係文書研究会編『上原勇作関係文書』（東京大学出版会、一九七六年）
- ・宇垣一成（角田順校訂）『宇垣一成日記』第一巻（みすず書房、一九六八年）
- ・宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策―陸軍大将宇都宮太郎日記』第三巻（岩波書店、二〇〇七年）
- ・倉富勇三郎日記研究会編『倉富勇三郎日記』第一・二巻（国書刊行会、二〇一〇・二〇一二年）
- ・四竈孝輔『侍従武官日記』（芙蓉書房、一九八〇年）
- ・渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第四八巻（渋沢栄一伝記資料刊行会、一九六三年）
- ・高橋義雄『万象録 高橋箒庵日記』第六巻（思文閣出版、一九八九年）
- ・坂野潤治・広瀬順皓・増田知子・渡辺恭夫編『財部彪日記 海軍次官時代』上巻（山川出版社、一九八三年）
- ・長岡外史文書研究会編『長岡外史関係文書 書簡・書類篇』（吉川弘文館、一九八九年）
- ・奈良武次『侍従武官長奈良武次日記・回顧録』第四巻（柏書房、二〇〇〇年）
- ・原奎一郎編『原敬日記』第四・五巻（福村出版、一九六五年）
- ・原敬文書研究会編『原敬関係文書』第一巻（日本放送出版協会、一九八四年）
- ・大山梓編『山県有朋意見書』（原書房、一九六六年）
- ・伊藤隆編『大正初期山県有朋談話筆記・政変思出草』（山川出版社、一九八一年）
- ・日本政治外交史研究会「《明石元二郎文書》及び解題―主要書簡を中心に―」（『法学

研究』第五八卷第九号、一九八五年九月)

- ・山本四郎「岡市之助文書について」(『神女大史学』第九号、一九九二年八月)
- ・黒野耐「田中義一中佐手記『随感雑録』第一・二回」(『海軍史研究』第三・四号、一九九五年四月・一九九七年一〇月)

#### 四、伝記・回顧録類(対象人物の姓名順による)

- ・小森徳治『明石元二郎』上・下巻(原書房、一九六八年復刻、原本は台湾日日新報社、一九二八年)
- ・荒木貞夫編『元帥上原勇作伝』下巻(元帥上原勇作伝記刊行会、一九三七年)
- ・須山幸雄『作戦の鬼 小畑敏四郎』(芙蓉書房、一九八三年)
- ・「小林順一郎」刊行委員会編『小林順一郎』(「小林順一郎」刊行委員会、一九六四年)
- ・四王天延孝『四王天延孝回顧録』(みすず書房、一九六四年)
- ・高倉徹一編『田中義一伝記』上巻(原書房、一九八一年復刻、原本は田中義一伝記刊行会、一九五八年)
- ・志道保亮『鉄山永田中将』(川流堂小林又七本店、一九三八年)
- ・軍事史学会編『元帥畑俊六回顧録』(錦正社、二〇〇九年)
- ・黒板勝美『福田大将伝』(福田大将伝刊行会、一九三七年)
- ・前田利為侯伝記編纂委員会編『前田利為』軍人編(前田利為侯伝記編纂委員会、一九九一年)
- ・宮内庁編『明治天皇紀』第三・七・八巻(吉川弘文館、一九六九・一九七二・一九七三年)
- ・斎藤聖二「解題一井口省吾小伝一」(井口省吾文書研究会編『日露戦争と井口省吾』原書房、一九九四年)
- ・河野恒吉「一次欧州大戦より見たる今次大戦の判断」(『経済倶楽部講演』昭和一五年第四輯、一九四〇年二月)
- ・田中国重述「大使館附武官及国際会議陸軍委員トシテノ回顧」(広瀬順晁編『近代外交回顧録』第三巻、ゆまに書房、二〇〇〇年)

#### 五、田中義一著作物

- ・田中義一(田家秀樹編)『地方ト軍隊トノ関係ニ就テ』(帝国在郷軍人会本部、明治四四年)
- ・田中義一『社会的国民教育 一名青年義勇団』(博文館、大正四年)
- ・田中義一『壮丁読本』(丁未出版社、大正五年)
- ・田中義一『未入営補充兵のしるべ』(新月社、大正六年)
- ・田中義一『欧州大戦の教訓と青年指導』(新月社、大正七年)
- ・田中義一『壮丁のために』(小林川流堂、大正七年)

## 六、新聞・雑誌

- ・『官報』
- ・『中外商業新報』
- ・『東京朝日新聞』
- ・『大阪朝日新聞』
- ・『報知新聞』
- ・『毎日申報』
- ・『欧州戦争実記』（博文館）
- ・『偕行社記事』（偕行社）
- ・『斯民』（中央報徳会）
- ・『戦友』（帝国在郷軍人会本部）
- ・『朝鮮及満洲』（朝鮮雑誌社、第一一四六号の題名は『朝鮮』）
- ・『帝国青年』（帝国青年発行所）
- ・『我が家』（帝国在郷軍人会本部）

## 七、研究書（和文）

- ・浅見雅男『皇族と帝国陸海軍』（文芸春秋、二〇一〇年）
- ・雨宮昭一『近代日本の戦争指導』（吉川弘文館、一九九七年）
- ・伊勢弘志『近代日本の陸軍と国民統制―山県有朋の人脈と宇垣一成』（校倉書房、二〇一四年）
- ・伊藤之雄『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』（名古屋大学出版会、二〇〇五年）
- ・井上清・渡部徹編『米騒動の研究』第五卷（有斐閣、一九六二年）
- ・遠藤芳信『近代日本軍隊教育史研究』（青木書店、一九九四年）
- ・岡本真希子『植民地官僚の政治史―朝鮮・台湾総督府と帝国日本』（三元社、二〇〇八年）
- ・小田部雄次『梨本宮伊都子妃の日記 皇族妃の見た明治・大正・昭和』（小学館、二〇〇八年）
- ・小田部雄次『49 人の皇族軍人 戦場に立った近代日本の影の主役たち』（洋泉社、二〇一六年）
- ・外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』上巻（原書房、一九六九年）
- ・加藤陽子『徴兵制と近代日本 1868-1945』（吉川弘文館、一九九六年）
- ・加藤陽子『天皇の歴史 8 昭和天皇と戦争の世紀』（講談社、二〇一一年）
- ・北岡伸一『日本陸軍と大陸政策 1906-1918 年』（東京大学出版会、一九七八年）
- ・黒沢文貴『大戦間期の日本陸軍』（みすず書房、二〇〇〇年）
- ・黒野耐『帝国国防方針の研究―陸海軍国防思想の展開と特徴―』（総和社、二〇〇〇年）
- ・軍事史学会編『第一次世界大戦とその影響』（『軍事史学』第五〇巻第三・四合併号、錦正社、二〇一五年）



- ・ 額満厚『総力戦体制研究—日本陸軍の国家総動員構想—』（三一書房、一九八一年）
- ・ 額満厚『近代日本の政軍関係—軍人政治家田中義一の軌跡—』（大学教育社、一九八七年）
- ・ 額満厚『日本陸軍の総力戦政策』（大学教育出版、一九九九年）
- ・ 額満厚『田中義一 総力戦国家の先導者』（芙蓉書房出版、二〇〇九年）
- ・ 小林道彦『政党内閣の崩壊と満州事変—1918～1932—』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）
- ・ 坂本一登『伊藤博文と明治国家形成 「宮中」の制度化と立憲制の導入』（講談社、二〇一二年、初出は吉川弘文館、一九九一年）
- ・ 新城道彦『天皇の韓国併合—王公族の創設と帝国の葛藤』（法政大学出版局、二〇一一年）
- ・ 鈴木正幸『皇室制度—明治から戦後まで—』（岩波書店、一九九三年）
- ・ 高杉洋平『宇垣一成と戦間期の日本政治 デモクラシーと戦争の時代』（吉田書店、二〇一五年）
- ・ 戸部良一『日本の近代9 逆説の軍隊』（中央公論社、一九九八年）
- ・ 外山操編『陸海軍将官人事総覧 陸軍篇』（芙蓉書房出版、一九八一年）
- ・ 永井和『青年君主昭和天皇と元老西園寺』（京都大学学術出版会、二〇〇三年）
- ・ 西川誠『天皇の歴史7 明治天皇の大日本帝国』（講談社、二〇一一年）
- ・ 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典 第二版』（東京大学出版会、二〇〇五年）
- ・ 林えいだい『聞き書き社会史 北九州の米騒動』（葦書房、二〇〇一年）
- ・ 原武史『大正天皇』（朝日新聞社、二〇〇〇年）
- ・ 藤井忠俊『在郷軍人会—良兵良民から赤紙・玉砕へ』（岩波書店、二〇〇九年）
- ・ 藤原彰『軍事史』（東洋経済新報社、一九六一年）
- ・ 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 関東軍』第一巻（朝雲新聞社、一九六九年）
- ・ 防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書 陸軍軍戦備』（朝雲新聞社、一九七九年）
- ・ 松田利彦『日本の朝鮮植民地支配と警察—一九〇五～一九四五年』（校倉書房、二〇〇九年）
- ・ 三谷太一郎『増補日本政党政治の形成—原敬の政治指導の展開—』（東京大学出版会、一九九五年、初版は一九六七年）
- ・ 森靖夫『日本陸軍と日中戦争への道—軍事統制システムをめぐる攻防—』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）
- ・ 安田浩『天皇の政治史—睦仁・嘉仁・裕仁の時代』（青木書店、一九九八年）
- ・ 山崎正男編『陸軍士官学校』（秋元書房、一九六九年）
- ・ 山室信一『複合戦争と総力戦の断層—日本にとっての第一次世界大戦—』（人文書院、二〇一一年）
- ・ 吉田裕『日本の軍隊—兵士たちの近代史—』（岩波書店、二〇〇二年）
- ・ 吉田律人『軍隊の対内的機能と関東大震災—明治・大正期の災害出動—』（日本経済評論社、二〇一六年）
- ・ 李炯植『朝鮮総督府官僚の統治構想』（吉川弘文館、二〇一三年）
- ・ 李升熙『韓国併合と日本軍憲兵隊—韓国植民地化過程における役割』（新泉社、二〇〇八年）

## 八、研究書（英文・ハングル）

- ・ Dickinson, Frederick R. *War and National Reinvention: Japan in the Great War, 1914-1919*. Cambridge: Harvard University Asia Center, 1999.
- ・ 姜東鎮『日帝의 韓国侵略政策史』（韓国：한길사、一九八〇年、同『日本の朝鮮支配政策史研究』東京大学出版会、一九七九年の韓国語版）
- ・ 金東明『支配와 抵抗, 그리고 協力—植民地 朝鮮에서의 日本帝国主義와 朝鮮人の 政治運動』（韓国：景仁文化社、二〇〇六年）
- ・ 金宗植『近代日本 青年像의 構築』（韓国：先人、二〇〇七年）
- ・ 潘炳律『韓国独立運動의 歴史』第四九卷（韓国：独立記念館韓国独立運動史研究所、二〇〇九年）
- ・ 徐仁漢『大韓帝国의 軍事制度』（韓国：慧眼、二〇〇〇年）
- ・ 李基東『悲劇의 軍人들—日本陸士出身의 歴史—』（韓国：一潮閣、一九八二年）

## 九、研究論文（和文）

- ・ 阿部昌平「第一次世界大戦の日本陸軍に及ぼした影響—歩兵戦術への適応を中心として—」（『戦史研究年報』第一八号、二〇一五年三月）
- ・ 庵逄由香「朝鮮における帝国在郷軍人会」（松田利彦・陳延媛編『地域社会から見る帝国日本と植民地—朝鮮・台湾・満州』思文閣出版、二〇一三年）
- ・ 伊藤之雄「原敬の政党政治—イギリス風立憲君主制と戦後経営」（同編『原敬と政党政治の確立』千倉書房、二〇一四年）
- ・ 今城徹「戦前期日本の軍人恩給制度」（『大阪大学経済学』第六四卷第二号、二〇一四年九月）
- ・ 小田部雄次「明治天皇の救済事業と軍事援護—『明治天皇紀』を中心に」（『静岡精華短期大学紀要』第九号、二〇〇一年一月）
- ・ 加藤祐介「戦間期の皇室財政—政治過程に着目して—」（『史学雑誌』第一二四編第一号、二〇一五年十一月）
- ・ 加藤陽子「政友会における「変化の制度化」—田中義一の方法—」（同『戦争の論理』勁草書房、二〇〇五年、初出は有馬学・三谷博編『近代日本の政治構造—日露戦争から太平洋戦争まで—』吉川弘文館、一九九三年）
- ・ 河西秀哉「新しい皇室像への宮中の対応—『倉富勇三郎日記』の検討を通じて—」（『二十世紀研究』第一三号、二〇一二年）
- ・ 北岡伸一「政治と軍事の病理学」（同『官僚制としての日本陸軍』筑摩書房、二〇一二年、初出は『アステイオン』第二一号、一九九一年七月）
- ・ 葛原和三「帝国陸軍の第一次世界大戦史研究—戦史研究の用兵思想への反映について—」（『戦史研究年報』第四号、二〇〇一年三月）
- ・ 吉良芳恵「宇都宮太郎関係資料から見た三・一独立運動—陸軍中央との関係を中心に」（『史艸』第四六号、二〇〇五年）

- ・吉良芳恵・宮本正明「解題 大正時期中期の宇都宮太郎一第四師団長・朝鮮軍司令官・軍事参議官時代一」（宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策―陸軍大将宇都宮太郎日記』第三卷、岩波書店、二〇〇七年）
- ・黒沢文貴「臨時軍事調査委員会について」（『紀尾井史学』第二号、一九八二年一二月）
- ・黒沢文貴「臨時軍事調査委員と田中軍政―総力戦と「大正デモクラシー」への対応に関する補遺一」（同・斎藤聖二・櫻井良樹編『国際環境のなかの近代日本』芙蓉書房出版、二〇〇一年）
- ・黒野耐「第一次大戦と国防方針の第一次改定」（『史学雑誌』第一〇六編第三号、一九九七年三月）
- ・桑田悦「「旧日本陸軍の近代化の遅れ」の一考察（第一次大戦直後の日・仏歩兵操典草案の比較と「火力戦闘の主体論争」を中心として）」（『防衛大学校紀要 人文・社会科学編』第三四輯、一九七七年三月）
- ・郡司淳「偕行社義済会の設立と活動―「大正デモクラシー」下の「法外」軍事援護団体一」（『日本歴史』第五五〇号、一九九四年三月）
- ・現代史の会共同研究班「総合研究 在郷軍人会史論」（『季刊現代史』第九号、一九七八年）
- ・額満厚「臨時軍事調査委員会の業務内容―『月報』を中心に―」（『政治経済史学』第一七四号、一九八〇年一月）
- ・国分航士「大正六年の請願令制定と明治立憲制の再編」（『史学雑誌』第一一九編第四号、二〇一〇年四月）
- ・小林栄三「米騒動への連隊出動と教員養成」（『歴史春秋』第五四号、二〇〇一年）
- ・小林啓治「一九二〇年代の軍事思想と国家総力戦」（『新しい歴史学のために』第一九四号、一九八九年三月）
- ・近藤正己「徴兵令はなぜ海を越えなかったか？ 台湾における植民地兵養成問題」（浅野豊美・松田利彦編『植民地帝国日本の法的構造』信山社、二〇〇四年）
- ・斎藤聖二「海軍における第一次大戦研究とその波動」（『歴史学研究』第五三〇号、一九八四年七月）
- ・坂本一登「新しい皇室像を求めて―大正後期の親王と宮中―」（『年報・近代日本研究』二〇号、一九九八年）
- ・辛珠柏（鄭栄桓訳）「朝鮮軍概史」（宋連玉・金栄編著『軍隊と性暴力―朝鮮半島の 20 世紀―』現代史料出版、二〇一〇年）
- ・スヴェン・サーラ「日独関係における陸軍」（工藤章・田嶋信雄編『日独関係史 一八九〇―一九四五』第二卷、東京大学出版会、二〇〇八年）
- ・高橋秀直「原内閣の成立と総力戦政策―「シベリア出兵」決定過程を中心に―」（『史林』第六八卷第三号、一九八五年五月）
- ・高橋秀直「陸軍軍縮の財政と政治―政党政治体制確立期の政―軍関係―」（近代日本研究会編『年報・近代日本研究』第八卷、山川出版社、一九八六年）
- ・手嶋泰伸「一九二〇年代の日本海軍における軍部大臣文官制導入問題」（『歴史』第一二四輯、二〇一五年四月）
- ・戸部良一「第一次大戦と日本における総力戦論の受容」（『新防衛論集』第七巻第四号、一九八〇年三月）

- ・戸部良一「朝鮮駐屯日本軍の実像：治安・防衛・帝国」（日韓歴史共同研究委員会編『日韓歴史共同研究報告書』第三分科篇下巻、二〇〇五年）
- ・中野良「大正期日本陸軍の軍事演習―地域社会との関係を中心に―」（『史学雑誌』第一一四編第四号、二〇〇五年四月）
- ・中野良「一九二〇年代の陸軍と民衆―軍事演習における賠償問題を中心に―」（『日本史研究』第五三五号、二〇〇七年三月）
- ・奈良岡聰智「第一次世界大戦初期の日本外交―参戦から二十一ヵ条要求まで」（山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『現代の起点 第一次世界大戦』第一巻、岩波書店、二〇一四年）
- ・西川誠「大正後期皇室制度整備と宮内省」（『年報・近代日本研究』二〇号、一九九八年）
- ・服部聡「第一次世界大戦と日本陸軍の近代化―その成果と限界―」（『国際安全保障』第三六巻第三号、二〇〇八年一二月）
- ・坂野潤治「大正初期における陸軍の政党観―田中義一を中心として―」（『軍事史学』第一一巻第四号、一九七六年三月）
- ・平間洋一「第一次大戦の海軍への波動―戦訓研究を軸として―」（『防衛大学校紀要』第六一輯、一九九〇年一月）
- ・平松良太「第一次世界大戦と加藤友三郎の海軍改革（一）―（三）」（『法学論叢』第一六七巻第六号―第一六八巻第六号、二〇一〇年九月―二〇一一年三月）
- ・朴廷鎬「近代日本における治安維持政策と国家防衛政策の挟間：朝鮮軍を中心に」（『本郷法政紀要』第一四号、二〇〇五年）
- ・松尾尊兌「米騒動鎮圧の出兵規模」（同『大正デモクラシー期の政治と社会』みすず書房、二〇一四年、初出は『史林』第七一巻第一号、一九八八年一月）
- ・松田利彦「解説 朝鮮憲兵隊小史」（朝鮮憲兵隊司令部編『復刻版 朝鮮憲兵隊歴史』第一巻、不二出版、二〇〇〇年）
- ・三鬼浩子「在郷軍人会家庭向け雑誌『我が家』」（『メディア史研究』第三四号、二〇一三年九月）
- ・三宅正樹「第一次世界大戦における日独関係と日露関係―日独ストックホルム交渉と対露武器供与問題―」（『国際政治』三八号、一九六九年四月）
- ・宮本正明「宇都宮太郎と朝鮮支配」（安田常雄・趙景達編『近代日本のなかの「韓国併合」』東京堂出版、二〇一〇年）
- ・諸橋英一「第一次世界大戦期における総動員機関設置過程にみる政軍関係―英国からの影響と文民優位体制の展開―」（『法学政治学論究』第九六号、二〇一三年三月）
- ・諸橋英一「国勢院とアメリカ戦時産業院―第一次世界大戦期の総動員機関における文民優位の進展―」（『法学政治学論究』第九七号、二〇一三年六月）
- ・山口利昭「国家総動員研究序説―第一次世界大戦から資源局の設立まで―」（『国家学会雑誌』第九二巻第三・四号、一九七九年四月）
- ・由井正臣「総力戦準備と国民統合」（『史観』第八六・八七冊、一九七三年三月）
- ・横島公司「カイザー訴追問題をめぐる民間側の認識―判事選任問題を手がかりに―」（『史苑』第七一巻第二号、二〇一一年三月）
- ・横島公司「ヴェルサイユ講和条約におけるカイザー訴追問題と日本の対応」（『日本史

研究』第六〇四号、二〇一二年一二月)

・横山久幸「日本陸軍の軍事技術戦略と軍備構想について—第一次世界大戦後を中心として—(一)・(二)」(『防衛研究所紀要』第三卷第二・三号、二〇〇〇年十一月・二〇〇一年二月)

・吉田裕「第一次世界大戦と軍部—総力戦段階への軍部の対応—」(『歴史学研究』第四六〇号、一九七八年九月)

・吉田律人「軍隊の『災害出動』制度の展開—高田衛戍地の事例分析を中心に—」(『年報・日本現代史』第一七号、二〇一二年)

・吉田律人「平時における政軍関係の相克—軍隊の雪害対応を中心に—」(『日本歴史』第八〇一号、二〇一五年二月)

#### 一〇、研究論文(英文)

・Burkman, Thomas W.. “Japan.” In *Researching World War I: a handbook*, edited by Robin Higham with Dennis E. Showalter. Westport: Greenwood Press, 2003.

・Chickering, Roger. “Total War: The Use and Abuse of a Concept.” In *Anticipating total war: the German and American experiences, 1871-1914*, edited by Manfred F. Boemeke, Roger Chickering, Stig Förster. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.

## 論文の内容の要旨

本論文の目的は、原敬政友会内閣期における田中義一陸相の陸軍指導に焦点を当てて、第一次世界大戦（以下、大戦と略す）が近代日本、特に陸軍に与えた衝撃の意味と、それを契機とする陸軍の自己改革過程を、国民・皇室・帝国との関係の再定義という視点から、総合的に考察することである。

そのため、本論文では以下の視角から分析を行った。第一に、陸軍にとって「大戦の衝撃」は、純軍事的な次元を超え、自らのあり方を規定してきた国家の諸領域、すなわち国民・皇室・帝国との関係を動揺させ、その立直しを迫るものであった。第二に、大戦の勝利がどの陣営に帰するかは最後まで予断を許さなかったため、その情報収集及び勝敗分析によって成立した「大戦の教訓」には、互いに矛盾する内容が混在しており、その意味で大戦後の陸軍の進路は決して自明のものではなかった。第三に、田中義一は日露戦後から一貫して陸軍と国民・皇室・帝国の一体化を目指してきたが、「大戦の衝撃」でこれまで築いてきた各領域との関係が動揺すると、その再定義を最優先課題とし、原との協力の下で陸軍改革に取り掛かった。こうしたトータルな視点に立ち、トータルウォーとしての「大戦の衝撃」と、それを契機とする陸軍の自己改革過程を、田中の思想と行動を通して考察したのである。

本論文は六章構成となっている。第一章では陸軍の武官派遣による大戦情報収集活動を、第二章では勝敗分析を通して陸軍内で成立した「大戦の教訓」の多面性を、第三章では日露戦後から軍民一致論を訴え掛けてきた田中にとっての「大戦の衝撃」の意味を考察した。そして、第四章から第六章にかけて、田中率いる陸軍が、大戦後に動揺しつつあった国民・皇室・帝国との関係を再定義していく過程を検討した。最後に、大戦勃発から終戦後にかけて、大戦研究のために欧米へ派遣された陸軍武官の詳細なリストを附表として載せた。その結果、本論文では以下のような結論を得た。

大戦勃発直後の時点で陸軍は、戦争の早期終結を予想したこともあって、ヨーロッパへの武官派遣には消極的であった。しかし、大戦二年目から派遣武官の人数が増え、その活動に関する制度も整備されるなど、武官派遣による情報収集活動は本格化した。なかでもフランス・イギリスに最多の武官が派遣されたことから、陸軍の主な大戦情報源はこの両国であったと判断できる。その一方、陸軍は大戦中にはスイス・スウェーデンなど、ドイツに隣接する中立国への武官派遣を強行し、講和成立後は大規模な調査団をドイツに派遣するなど、ドイツ情報の獲得にも熱心であった。しかし、日本からの頻繁な武官派遣や中立国における強引な武官駐在に対して、連合国の反応は必ずしも好意的ではなかった。

ところで、陸軍がドイツ情報の獲得を重視した背景には、派遣武官の収集した大戦情報に基づいて行われた勝敗分析があった。大戦勃発直後の陸軍は、連合国よりドイツの軍事的能力を高く評価するとともに、大戦の勝敗はドイツとロシアとの間で決まると予想した。次に、大戦中期から休戦直前までは一貫してドイツの軍事的能力を高く評価したのに対し、連合国の軍事力による勝利の可能性を極めて低く見積もった。そして、ドイツの善戦から精鋭軍・国民教育・軍国主義などの教訓を得ていた。それだけに、ドイツの革命と敗北は大きな衝撃であり、陸軍は大戦後の勝敗分析を通して、国民皆兵主義・経済的自給自足・自覚に基づく服従などの新しい教訓を得たが、ドイツの善戦から得られた教訓の一部は、同国の敗北後もなお有効性を失っていなかった。その点で「大戦の教訓」の意味は多面的

であり、大戦後の陸軍は岐路に立たされていたといえる。

こうした状況の下で、大戦後の陸軍改革の方向を決めたのが田中義一であった。田中は日露戦争の経験から、将来の大戦争に備えるため、在郷軍人を媒介として軍民関係の緊密化を図り、自ら活発な講演・執筆活動を行った。また、大戦中には軍民一致論を訴え掛ける対象を青年・未教育補充兵・女性へと拡大していくことで、陸軍と国民との接触面を極限まで広げた。一方、田中は陸軍の存立基盤を皇室と国民の両方に求めるとともに、皇室に働き掛けて軍民一致論に対する理解と支援を獲得しようとした。さらに、植民地朝鮮における青年団の設立を構想し、機関紙『戦友』を通して朝鮮の実情を内地に紹介するなど、本国と植民地との「結合」強化にも積極的であった。

そして、大戦の勃発と総力戦化は、田中に軍民一致の必要性をいっそう痛感させ、国民への訴え掛けを活発化させる動機となった。また、日露戦後からドイツを軍民関係の模範としてきた田中にとって、大戦中におけるドイツの善戦は、自らの論理の正当性を裏付けるものであった。しかし、シベリア出兵宣言と同時に国内で起こった米騒動は、在郷軍人や青年団員が騒動に参加した点、鎮圧のために出動した軍隊と民衆が衝突した点、軍民一致が最も要求される出兵の最中に銃後で騒動が発生した点、これまで軍民関係において否定の対象としてきた、ロシア革命を連想させる事態になった点で、大きな衝撃を与えた。さらに、ドイツの革命と敗北、各国の帝政の崩壊と帝国の解体など、大戦終結前後における国内外情勢の急変は、田中がこれまで築いてきた、陸軍と国民・皇室・帝国との関係に破綻を来しかねないものであった。そこで、田中率いる陸軍は、大戦後、この三つの領域との関係の再定義を課題として、自己改革を試みるのである。

それでは、具体的にどのような処置が取られたのか。第一に、米騒動を契機に軍隊と国民との間に生じた亀裂は、大戦後、現役・在郷軍人の生活難による思想的動揺の危機と、徴兵制度撤廃問題に象徴される国内外の反軍・平和思潮の高揚によって、さらに深まった。そこで、田中は軍人の生活安定と国民の兵役負担軽減を通して軍民関係の修復を目指した。まず、軍人の俸給・恩給を大幅に引き上げるとともに、在郷軍人救済のための軍事援護団体の設立に自ら関与した。また、軍隊内務書・軍隊教育令を改正して兵営内における軍人の待遇改善に努めたのみならず、従来歩兵などに限られていた二年在営制を全ての特科兵に拡大実施した。その過程で、「上原派」や山県有朋などからの反対を排するのみならず、所要予算の獲得のために大蔵省との対決姿勢を厭わず、原にも積極的に働き掛けるなど、田中の主体性が目立つ。

第二に、大戦後の陸軍は世界的な君主制の危機、大正天皇の軍務遂行困難による「大元帥の不在」、大戦中に膨張した皇室収入に対する国民の反感、騒擾時における皇族軍人率いる軍隊と民衆との衝突の可能性などの問題に直面していた。ところで、田中は日露戦後の時点で、天皇の戦時統帥権行使が天皇制維持にもたらしうる危険性を認識していた。そこで、大戦後は「大元帥の天皇とそれを支える皇族軍人」像をやや弱める代わりに、皇室を軍人の生活保護に積極的に関与させることで、「軍人の保護者」という新しい皇室像を創出しようとした。まず、軍隊内における皇族軍人の住居や、陸軍特別大演習終了後の宴会を質素にするなど、天皇・皇族自ら儉約を实践する姿を演出した。次に、皇室収入の一部を軍事援護事業に充てるよう、皇室からの内帑金の下賜を仰いだ。最後に、皇族軍人を部隊指揮から退かせるとともに、彼らに軍人に相応しい能力を備えることを求めることで、皇族男子の軍人化慣例の実質化を図った。

第三に、大戦中における植民地人の戦争動員、大戦後の帝国の解体と諸民族の独立、植民地朝鮮における三・一独立運動の勃発などによって、日本の帝国支配秩序は揺らいでいた。その中で、陸軍が改めて注目したのが「朝鮮人軍人」の存在であった。彼らは韓国併合の過程で生み出された副産物的な存在であり、併合後は日本の陸軍軍人に準じて取り扱われるとされたが、実際は内地人軍人と同一の待遇は受けられず、帝国内におけるその地位も極めて不安定であった。そこで、大戦終結直前に陸軍中央及び出先軍の新首脳として登場した田中と宇都宮太郎は、帝国内の「統合」強化のため、「朝鮮人軍人」を積極的に利用した。まず、進級・叙位叙勲・給与・恩給などの面において、「朝鮮人軍人」に対する従来の差別待遇を撤廃した。次に、彼らに日本の陸軍軍人または準軍人としての法的地位を付与した。最後に以上の措置を、三・一運動後の朝鮮人に対する平等な待遇と「同化」を象徴するものとして宣伝した。

以上のように、大戦は国家の全領域を動員して戦われた総力戦であっただけに、戦争の影響も全ての領域に及んでいた。その意味で大戦後の陸軍が直面した課題も、純軍事的な次元を超え、大戦の影響を受けて動揺しつつあった国家の諸領域との相互関係をいかに再定義するのかという、まさに国家の中での自らのあり方に関わる問題であった。ところで、田中は日露戦後から一貫して軍民一致論を訴えており、その中で陸軍と国民・皇室・帝国は一体をなしていた。それだけに、田中は「大戦の衝撃」の意味を正しく理解することができ、彼の指導の下で、大戦後の陸軍は自ら進んでこの三つの領域との関係の再定義に取り掛かったのである。なお、その過程でドイツ・モデルに対する一定の見直しが行われたことも、本論文では明らかにした。

最後に、従来、「大正デモクラシー」に代表される当時の社会変動への適応、総力戦体制構築、軍備近代化などの面で論じられてきた、大戦後の陸軍の「失敗」について、陸軍は国民・皇室・帝国との新しい関係を模索したものの、そこには限界があり、永続性を持つ関係の構築には至らなかったという展望を提示した。